

子どもが保育者との二者関係から離れるときをどう見るか

○笹木 珠代（京都大学大学院 人間環境学研究所） 佐治 由美子（愛育学園）

【はじめに】

保育現場では、子どもが保育者との二者関係を強く求める時期が到来することがよくある。保育者との濃密な二者関係を経た子どもが、保育者との二者関係から離れて自ら歩み出す際に何を体験しているのか。そして、保育者の側はその時をどのように感じ、何を体験しているのか。本研究では、津守（1997）の提唱した「存在感」という子どもの育ちの柱を手がかりに、その内実に迫りたい。

【方法】

愛育学園（特別支援学校）のある日（2023年10月某日）の保育におけるある児童Sと筆者とのかかわりの場面を事例として取り上げ、考察を加える。

なお、本研究では間主観的に現れ展開する保育の世界の豊かさを検討するため、エピソード記述法¹（鯨岡, 2005）を用いている。

【倫理的配慮】

本研究については、学校長の承諾を得た後、対象児の保護者に対して研究の目的や内容、個人情報の取り扱いについて書面と口頭で説明し、同意をいただいた。

【背景】

S君は小学2年生（当時）のダウン症男児である。筆者が出会った当時1年生のS君は、周囲の大人が「おはよう！」と声をかけるだけで「キライイ！」と相手からの意識を全身で拒絶するように叫んで走り去っていた。周囲の人のちょっとした感情の起伏を敏感に察知し、常に“この人は本当に僕のことを大切にしてくれるか”を見定めるように相手の表情を窺っていた。

そんなS君が、1年生の春から筆者を遊びの世界に招き入れるようになった。S君はダイナミックな遊びや素早いやりとりのラリーを展開した。その姿は“僕のリズムにぴったりと沿うような相手であってほしい”と横並びの関係を求めているようだった。S君は朝登校すると筆者の名前を呼びながら校内を探すようになり、1日中傍に在ることを強く求めた。結果として、S君と筆者は18ヶ月の間毎日ほとんどの時間を共に過ごすこととなった。

2年生の秋頃から、S君が職員のKさんを遊びに誘う場面が見られ始めた。しかし、時々やりとりが

噛み合わずS君もKさんも困ってしまう展開が何度か続き、S君はだんだんと再び筆者と1日過ごすようになった。この頃のS君は、どこか常にイライラしているような雰囲気を漂わせていた。筆者の中には“S君が再び私との世界に閉じてしまうのではないか”、“S君の全てを私は一人で受け止め続けられないといけないのではないか”という窮屈な感覚が生まれていた。この感覚を同僚たちに相談しながら過ごしていたある日のことだった。

S君は表庭の砂場での水遊びに筆者を誘った。S君は「きて！いっしょにやろ！」といつものように筆者を砂場の中に誘ってきた。今までだったら、何のためらいもなく裸足になりS君と一緒に土を掘り始める筆者だったが、この日は「ちょっと待ってね～」と言ってその誘いを受けなかった。それまでのS君との“横並び”の関係から少し離れてみようと思ったからだ。普段のS君は、大人が自分のイメージと大きく違う返しをすると怒ったり「なんでよ！きてよ！」と強く引っ張り込むことが多かった。しかし、この日のS君は、筆者からの断りを大して気に留める様子もなく一人で水遊びを再開した。

筆者は今までとは違うS君の姿に少し驚きながら、砂場の周りにすのこを並べることにした。

【エピソードと考察】

エピソード 1

私が裏の倉庫からすのこを持って戻ると、S君がいつの間にか水着を脱いで裸ん坊になり、私が並べておいたすのこの上に座っていた。その姿は、“ふざけて裸になった”という様子ではなく、リラックスした様子で“つい脱いでしまった”というような気持ちのいい開放感があつた。裸ん坊のS君は、ホースで辺りの木々にお湯を飛ばしたり自分の身体にお湯をかけたりしている。裸ん坊で庭の真ん中に佇むS君に、私は今までとは異なる不思議な感覚を覚えた。S君のことを“初めて見た”ような感じがしたのだ。これまでのS君は、私の身体に密着するようにして切実な眼差しを向けてくる姿が印象的だった。私は“応えなきゃ”という切迫感とともに、しがみつくとS君を“自分の身体の一部”のようにさえ感じていた。しかし、目の前のS君は堂々として

一人でいることに満足感を抱いているように感じられた。S 君の輪郭は光っているように見え、私の中には爽やかな感動が生まれた。

考察 1

津守（1997）が提唱した子どもの育ちの上で重要な柱の一つに「存在感」がある。これは、「この場を自分が生きる場所と実感ⁱⁱ」する感覚のことであり、「日常一緒に生活する大人が自分を信頼してくれていると感じることが、子どもの存在の確かさの感覚をつくⁱⁱⁱ」るのだと述べられている。

前述したように他者から脅かされる危機を抱えていたこれまでの S 君は筆者との関係を通して自らの存在感を育んでいた。しかし、本エピソードにおいて、S 君は存在感を一人の個として発見し味わい始めた。それによって、筆者は“S 君を初めて見たような感覚”を得たのだろう。

エピソード 2

私は、あぐらをかいている S 君の隣のすのこに反対方向を向く形で膝を抱えて座った。近づき過ぎたくはなかったが、“そばにいる”感覚も届けたと思ってのことだった。S 君はそんな私に声をかけることはなく、相変わらず気持ちよさそうにホースの遊びを続けている。私は清らかな存在感を斜め後ろに感じながら、ここにいることが許されているような心地の良い軽さを味わった。

考察 2

これまでの〈S 君-筆者〉の関係は、ぴったりとリズムに沿うような横並びの関係であり、活動を二人で同方向に進めてきた。しかし、本エピソードでは筆者は S 君の神聖な存在感を侵襲しない位置を探り、S 君の反対向きに自身を位置付けている。筆者自身も“ここにいる”という自身の存在感を味わうことができた時間である。

津守（1997）は、保育者-子どもの関係において「何かと区別しがたく一体になっている」関係から「互いに独立した人間として『ある』関係」^{iv}への変容を人間の育ちの重要な契機とした。本エピソードの S 君と筆者は、互いに存在感を味わい認めることで「ある」関係に立つことができたのではないか。

エピソード 3

5 分ほど経ち、S 君がしばしば自分の身体にホースのお湯をかける姿が見られ始めた。私は（寒くなってきたかな？そろそろ上がるかな？）と思い、近くに用意してあったバスタオルを手渡した。すると S 君は、ホースのお湯を胸のあたりに当てながらバスタオルにくるまって、すのこの上に横になった。温かさが全身に渡り、眠る前の赤ん坊のような安心しきった表情をしている。S 君は、今まで聞いたことのない甘い声で「ムニャムニャ…あったかいなあ…」と呟きながら目を閉じた。私はその姿を見て、（サナギになっている…！）と思った。

考察 3

筆者は S 君の姿を見て“サナギになっている”と直感したが、その意味はこの時点ではわからなかった。しかし後から振り返ると、S 君はこの次の日から学期末まで筆者を求めることがなくなり、K さんを積極的に遊びに誘うようになった。以前見られていたようなやりとりの噛み合わなさはなくなり、S 君が K さんを戸惑わせないように自ら調整している姿が垣間見えた。さらに、S 君の言葉の語彙が格段に増え、以前は物を投げたり唾を吐くことでしか伝えられなかった気持ちや意図を言葉で伝えることに挑戦する様子が見られるようになった。改めて考えてみると、筆者が“サナギ”と直感した背景には、S 君の新生への予感があったのかもしれない。

【おわりに】

本研究では、保育者との濃密な二者関係を経た子どもがそこから離れて自ら歩み出す際に、子どもと保育者の両者それぞれが“今、ここにいる”という「存在感」を味わうことを通して、存在を了承しあう「ある」関係に立つことができることが示された。そこには、離れることに不安を感じたりしがみついたりするのは異なる次元の、伸びやかな満足感と他者としての存在感に出会った際の畏怖にも近い神聖な感覚が同居していることも明らかになった。

今後も、子どもの育ちを外側から安易に“A から B に変化した”と見なししてしまうのではなく、子どもが体験している“いま”を細やかに感じ応答しながら、その豊かさと面白さに迫っていきたい。

ⁱ 鯨岡峻『エピソード記述入門』東京大学出版会, 2005

ⁱⁱ 津守真『保育者の地平』ミネルヴァ書房, 1997, p4

ⁱⁱⁱ 津守真『学びとケアで育つ-愛育養護学校の子ども・教師・親』, 佐藤学, 小学

館, 2005 p47

^{iv} 津守真『保育者の地平』ミネルヴァ書房, 1997, pp134-135